

存を維持されている、ここには巧利性による激突と対立が激化し、商人的な巧猾さが衰り、官僚的な独断が必然に横行するそのために、真の意味からの平和はなく、一時的な休止時間があるのみである。

大衆はいつの日、自由と平和と、平等と共同の幸福を迎え得るであろうか？

自主性と、自治の協働労働と、その人間性に即した生活に対する無知、あるいは、人間性の持つ、本来の美と平和と尊厳に目を覆い、耳をふさぎ、併も蹂躪し、従属と宿命観にまで高めた柔順な羊の群、これの又の名を、経済事情に左右せられた歴史と云う。

四、支配と被支配の反覆としての史観

無権力、無支配の原始共産社会が、司祭者的支配（長老、巫女）にある間は、総べてが神につかえる民衆であり、共同の生産者であると共に、共同の土地に、共有の財産所有と、共同の消費を、その生活の総てに持ち、共同社会の為に利己的なものを考えてもみなかったであろう。

この場合の司祭者は、長老を意味するか、巫女の多年の経験者がその任にあった。これは、多年の経験を持った、その知恵と識見を大衆へ奉仕する民衆の先導者でもあった。と共に、大衆の尊敬の表徴であり、共同の禍福と利益の為めの神からの使者でもあった。

然るに、一度び司祭者が武力を行使し。あるいは武將と結託するに及んで、司祭そのものが支配的地位のものとして確立され、政治的優越者として民衆に君臨した。その結果、経済上の独占、又はその指導権をも把握し、土地も物資も彼等の為めのものとなり、この種の、奪略した土地と物資の専断的横略が、その習慣化と因習とから、やがては個人の私有にまで変化し、土地のない農民や、資材のない単なる道具としての、労働者が作られるに至ったのである。

かくて支配者は、祭政一致の揺るぎない地位を確保するに至った。即ち支配関係が樹立され、統一国家が成立し、以後、強権支配の歴史が発祥し、人類の協働と共営の、光榮ある永続した歴史は、泥土にふみにちられ、支配者と被支配者の、生かすものと生かされるものとの、二大階級に分離されるに至った。

彼等支配者による武力は、その初期には神意と称して、民衆に君臨する最高の論拠とし、大衆の盲従をその主要な原因とした。

ある時は、神寵を負うとする行動を、指揮者と大衆そのものの中に、神靈や靈夢の告げとして、その威徳に感激し、敬虔と随順の行動となり、征服が自信の中に進展した。

現在日本と称するこの島々は、何万年もの永い間から住んでいて、宮々と築き上げて来た、旧石器時代人が、縄文式時代、彌生式時代と文化史を創造して来た。この先住民民族にとって、多量同時殺人など思いもよらない、平和な呪術と美を愛する民族であった。

そこへ、狩獵の爲めではない、殺人の爲めの武器を持ち、軍隊を引具した、すでに強權支配を打ち立て、殺人と奪略の習慣を持つ一族の、集団侵略と制圧があった。

彼等による血の征服と威迫とで、人間の人間による同時多量虐殺が遂行され、武力的な、政治的統一と云う、搾取機構が成立したのである。

これは、初めに女王卑彌子、後に倭の五王であり、後に皇孫族と自称した、司祭と武力を兼備した、支配者とその一群であった。

後に彼等の長を天皇と呼称するに至ったが、彼等はこの土地に於て、最初に、人間による人間の血を、多量虐殺によつて流し、あまつさえ、強制と掠取の制度を作造した元兇である、しかも猶祖神を持つと称している。

国家と称する支配と掠取の表徴がある上に、今次大東亜戦争に於て、大多數の日本国民を死地にもむかしめ、原爆の悲惨を残し、なおも恥づることなく、年間所得が皇室費として四億三千万以上に及び、その年間所得は、総理大臣百人分の年給以上という。国民の脊血に依存している。この者を、国の表徴と云つて崇めよと云う。果して何を意味する表徴なのであるか……。

侵略と掠奪と、虐殺と偽瞞で築いた過去を讀める、この無謀と無知と、蒙昧の表徴でしかない野蛮な遺風を、何故に、この文化の進んだ現世代に残さねばならぬのか……。

支配と被支配の是認と肯定以外に、何程の意義があろう。

およそ国家と名付けられるものには、その殆んどが、これと軌を一にした建国の史実によつてなっている。

近くはアメリカがそうであり、先住土着民に対する白人の、掠奪と暴行と殺人によつて作られた、侵略史がそれである。

建国と称するものの基点こそ、人間の尤も野蛮な表徴でしかない。人間として最も恥辱とす可きものとしての、愚行が公然となされているのである。

権力支配そのものの存在理由として、支配する階級は、被支配者大衆の、社会生活的事象に対する一切の主導権を持ち、圧迫と搾取と、教育又は宗教による精神的去脱、即ち去勢し懐柔する偽瞞によつて、その存在が維持継続せられるのであつて、およそ自由と平等の人間の欲求に対する政治的歪曲、又は民衆そのものの平和への意志や、幸福、自由を希求する当然の権利を否定し、その環境を無視する事なしには、存在性を喪失し、消滅する本源的な欠陥を持っている。

これは反面、偽瞞や籠絡がいつかは意識に於て露見し、否認される、人智の限りある弱点だからであり、人間の人間では常に、そしてしばしば見受ける現象でもある。

又他人に対する優越的な態度の中には、圧伏と尊大と威圧とを伴なり、何等かの条件なしには成立し得ないものである。

或時は神權把握者として、あるいは武力的優越、経済的優越、等々数え得るのであるが、

この中のどの一つをとらえて見ても、時と所を得れば、何者によっても、把握し得るものでもある。

現にソ聯に於て、フルシチョフは、かつては従属する師であつたスターリンを、偉大なる兇惡犯罪者として、その遺骸をも抹消し、時を利して、反対派をスターリン主義者の名に於て、かつての友や同僚をも肅清し、血祭りにあげている。しかもなお、このフルシチョフにしてなおかつある日突然、虚を突かれるように、失却せしめられたのである。

圧伏は、反撥と云う精心的必然の結果を持ち、威圧者に何等かの意味に於てでも、弱体化が生じたと見るや、服従者の意志は、支配的地位への狂奔となり、その位置を転覆し奪取するための、謀略と策動に血と汗をしばり、同調者との共同動作により、支配的圧伏は転換される。

即ち、権力的事象への意識的欲求、及び権力的、あるいは支配的地位への意識的肯定があつてこそ、実現する転換変移である。これは権力支配的環境と意欲の存在する所には、必らず権力的支配は発生し、併も必滅する。

権力的支配は、それが如何に強大堅固であらう共、必然に転換する命運を荷負い、それ自身に、滅亡の必然を歴史は実証して来たのである。

即ち、如何に強固に巧妙に、権力支配によつて統一されても、必然に多元化され変移する、精神的欠患と墮落の所産なのである。

過去幾十世紀、及そ権力的支配が、この地球の一隅に発生し、転換し、再生したその事が、人間界に、同族相咬む悲惨な頁を、殺戮と、経済的掠取と、血と圧制に色彩つて来た事か、この野蛮の遺風は断絶せねばならぬ。

初めに神の名により、司祭者による支配が発生し、武力と結んで、政治すると云う強権的支配の実体が備えられた。

然るに強権支配そのものは、その当初に於て、脆くも崩壊する性質を内包し、本質的に持つその脆さは、非常に巧妙化されている現在でも、その性質の実体を変えてはいない。

何故なら、強靱な人間性と、その意欲と知恵と良識に對し、基本的矛盾を脱し得ない病巣を常時持つている。それは、圧制と偽善と、無知を常態に据え置こうとする、人間性に對する、本源的な背反と矛盾を内持する結果である。

司祭者的強権は、異教的反撥又は暴露の実証を培い、その内実暴露は、圧伏されるものの不平や不満と結び、武力的背景の拡大によつて転覆した。

併もその時の民衆は、強権そのものの存在に對し、批判的知能がなかったがために、これを支持し、転覆が交替に終る、権力の移行を援護し、むしろそれに協力する無知な道具でしかなかった。

この民衆自身の持ち続けた不明と迷蒙は、日頃の支配権力支持を謳う教養や習慣と、宗教的去脱と因襲のために、覚醒する事のない、精心的鉄鎖として、現今にまで持続されて

いる。

民衆は生活的脅威の故に従順であつた、然も脅威を武器とする、權威に対し劣等感に培われた支持者でさえあり得る。

この脅威は、ある時は神であり、習慣であり、現代ではその上に、貧困と法律と監獄に名をかえている。

では、この脅威を呼びさます実体とは、如何なるものであろうか？

それは権力支配者による、強制と経済的占有であり、日常の生活を、明日知れぬ脅畏に晒して置くその事であり、その上、強権的支配を護衛する機関である政治府と、その使用人達の振う法的威圧によつて、飛躍的生命を委縮せしめられたのが民衆である。

かつて武權制時代には、一族郎党が強権を護衛する機関そのものであつた。然るに支配権力の拡張強大化に伴う、権力的普遍化は、支配勢力の拡大と多数化、延いては乱立化の防禦処置もあつて、支配の巧妙化にまつて法文の重作となり、反逆抗争への防壁を、強固なものにまで構築するに至つたのである。

が、反逆の根は断えることなく、遠隔の地に武力は蓄積され、共に支持者獲得の爲めに、思想宣伝に同盟に、強大化を辿り、権力争奪の機運が熟するを待つて、共に蜂起し、転覆瓦壊し、闘争から奪取への血の惨禍を経て、確立されたのが、封建国家であつた。

この封建国家を支持したものは、権力的支配の存在を肯定した、支配者への追従者であ

ると共に、否定反撃し壊滅まで成し遂げる事を知らうとしない、従順な民衆それ自身でもあつた。

泣く子と地頭に負ける彼等は、何故に自ら主となり、自ら治めた、永い共產共黨の歴史を、権力支配の移行にゆだねねばならぬのであろうか……。

強権の武力的威圧と、法文的制圧や、日頃の教養又は宗教的去脱もあるが、民衆自身が、政治される事と、頼る事の盲従性を払拭する事がなかつた。

その知識的卑屈さや、劣等感がなかつたとは云い得ない。この思想的貧困こそ、強権支配を永続せしめる因である。

が、不平等と不満とは、人間的自覚を徐々にではあるが進展しゆき、ある時は、苦痛による不満の堆積としてのやむにやまれぬ爆発として、一撥や暴動を惹起し、不平は友を呼んで結束した。

かくて、思想宣伝は対者の否定にはじまり、研鑽、継続され、一度び芽生えた種子は、それを育くむ、人間性と云う強靱な土壤に生い立ち、刈り取られても、刈り取られても後を断たず、生長していった。

こうした社会機構は、強権否定の思想を、判然と描いた。即ち無権力無支配の自治主義無政府主義思想の芽萌えである。

これは、日本では徳川中期に、安藤昌益の原著「自然真営道」に、農こそ基本であり、

武士は無益の存在である、其他、等々歴然と述べる所であり、又中国では今を去る二千余年前、許行と云う人が、農本的無政府主義を實踐し、乎成り広範圍にまで、その自治共產制を拡大した記録もある。が、時に利あらず強権者の武力の爲めに制圧されてしまった。こうした、強権支配の社会機構のもつ必然として、不平と不満とが、強権支配に対し、依然として無自覚の儘ではあるが、常に拡大される反面、権力奪取の爲めの野望が、同気相求める者と結んで、新らたなる盲信のもとに、凝結し、拡大発展し、次ぎに經濟的占有の強大化を武器として、再び転換の氣運を涵養して、資本主義的近代国家への転換となつたのである。

かくて、平和と平等と自由による、幸福を追う民衆の夢は破れ、再び三度び権力的支配は移行した。

即ち権力的支配を拒否する事のない民衆は、再三再四、権力的支配を移行せしめる動力であつた。しかもなお、現実にあつて、次代の権力支配的転移を強要し、煽動し、信仰せしめるものにマルクシズムがある。

彼等マルキストは、権力的支配を肯定する論理により、段階論をもつて大衆を籠絡し、弁証法的唯物史観を持つて、信仰的過程をでっちあげ、大衆の強権的支配への盲従と、彼等による、支配への移行を支持せしめるのである。

即ち権力的支配が、その発生時に於て、その存在の肯定と支持によつて、持続されたの

と同様に、未来にあつても、この原理には変わる事がなく、肯定と支持を続けるなら、その爲めの争奪闘争によつて惹起される惨禍と政治的偽善と掠取と不平等からくる苦悩は民衆の犠牲に於て永続されるのである。

これは過去五千年に及ぶ日本では未だ二千年を出でない権力支配の反覆としての人類史が、如実に実証する所である。

五、滅亡するものと、創造するものとの史観的分類

人類の歴史にあつて、共存共營の史実は、人間蒼生の当初より、今を去る約五千年以前まで、この日本にあつては未だ二千年に満たない當時にまで、二十万年間と呼ばれる永い年月、協働の生産と消費の、平和と共同の歴史を同胞間に綴つて来た。今になお、その片鱗と実情は随所に見聞される。

奈良県榛原町に近い心境部落は、一切を共有集団制のもとに生活している。ここの共產部落には、支配者はなく、彼等にとつて総べての父母は共同の親であり、その子供達は共同責任の中に平等に育くまれ、ただ世話役がいるだけの、家族的エゴイズムのない共產体である。

これは権力的なもの、支配的なものの衰滅、あるいは皆無な状態の所には、必然に創造

される自主自治の共同体であり、人間性に賦与された、巧利性をなくし、あるいは利己的な醜汚な意識活動（これは排他的である）を、脱した所にのみ尤も自然に形成される、共同体のもとに抬頭する秩序である。

又、現に生活され続行され、繁榮に向いつつあるイスラエルの、『キブツ』（ヘブライ語のグループ）運動に於ける、共同体の在り方も、この場の参考資料としては好適な引例と思える。

キブツ人口は、現在（一九六七年）九万人位であるが、小は二百人から、大は二千人を一単位とした、完全な協同社会であり、そこには広大な農地のほか、病院、教育施設、娯楽施設、二次加工のジュース工場、カン詰工場、などの軽工業施設を持ち、小文化都市を形成している。

ここでは、各人が能力に応じて働らき、必要に応じて供給を受ける形態を持ち、無権力、無支配、無強制の共同管理を持つて運営し、財産は共有であり、併も中国の人民公社や、ソ聯のコルホーズ的な強制のない、人間の自由と、責任に於て運営されていて、共產共民主義だ、とキブツ関係者は云っている。

それだけに、子供の教育も、幼稚園から十八才の高校卒業までは、親から離れて、キブツ内で共同生活を営み、教育費は無料、無試験制である。

この事実は何を語るのであらう。

強権と支配による、経済の独占と掠取と専横のために、さんざん苦闘してきた人達が、ただでさえ貧困の中を、戦争によって難民となり、無一文の全くの裸身から出発した、人間性だけに頼った、純粹の人間性に於ける創造であり、自然に備わる社会性本能に於ける意識性と倫理化の結集体であり、理想的創造の世界であると云える。

この秩序は、人間が原始創世の時代から持続した、人間なればこそ築き得た、精神的協和と、平和と平等のための、無意識の内にさえ築き得る、倫理的現象である、と云える。

要は、対立や、対立の統一にあるのではなく、それは政治的歪曲と強制を意味する言葉以外ではない、個性の尊重と理解と云う、相對の感念と、それによる融和こそ、人間心理の理想であり、生活と美の極限を謳うのである。これあればこそ、現実人間を存在せしめ、未来に向って繁榮を約し得る、人類の断えざる進化が、その基底に、その美しい協和の本能的秩序を持っていると云える。

即ち人類が滅亡せざる限り、滅亡する事のない主体に、人間性そのものが底位となり、主体となつて存在するのである。

この人間性は、本能と意志と衣食住によって存続した。本能は存続の基底であり、意志と意識活動は、衣食住を、発明と発見と創造の名に於て左右し、築きあげ、発展進化せしめた。

しかし、他面、支配と徒食と放従の甘味に酔うエゴイストの群れと共に、隷属、盲従を

肯定した、人為的秩序の構成をも敢えてしているが、これは、誤てる精神創造による不倫の極である。

これ等は、あらゆる個体的現象が、衰滅するものとしての宿命を荷負うそれと同様に、人為的に創造されたものの、必然的結果である滅亡の現象が、人類なればこそその、発明や発見の永い歴史にあつて、進化の名による、人為的なればこそその衰滅への推移である。併しこの衰滅には、一つのものである滅亡の時には、次代のものの創造の礎石となり発展した、建築的衰滅と飛躍的創造がそれであり、これに類似した現象として、思想に思念に、理智に解析に、精神的な進化をも作り上げている。

現在の科学に技術に、社会に、衣食住の万般に涉つての進化と創造が、よくその間の消息を伝え語っている。

然るに、人間による人間の支配関係は、その悪質なる方向への、創造的精神史として、人間が人間に君臨し、蹂躪し、掠取する、その野蛮な慣行の一つの衰亡は、より巧妙な奇策と手段と術数を生み、宗教も教育もそのために動員され、ある時は封建制度のその様に、絶対的な階級的拘束を、武力と法度によつて民衆生活の枷とした。

然るに、民衆はこの首枷手枷を意識する事なく、ただ本能的な意欲に於て、これを嫌惡し排撃するが、これは滅びる事のない創造を飾る、人間性そのものによる反撃である、が、惜しむらくは、意識的、思想的系列を持たないそのために、次代の、権力支配の後継

者によつて利用される所となり、転覆移行の結果的方向にのみ、大衆は、助力する破目に陥入らざるを得なかつたのである。

かくて、いつも同じ原因と動機と進展の経路を辿つて、権力機構は滅亡し、かつ再建された。

即ち、滅亡するものの歴史として、権力支配の史実は、権力移行に於て継続され、より高度な、惨忍で苛酷で巧妙な、滅亡と争奪の歴史を綴るのである。

然るに亡びる事のない歴史は、文化に思想に滅びる歴史を剔抉しつつ、創造の歩みを続けつつある。

それは権力否定の想念であり思想であると共に、権力支配なく、搾取のない目主自治と、共同の本能を主動因とする秩序である。

前述の本能論的史観、及び、本能そのものの持つ秩序は、滅びざる創造の歴史である。あれ程巧妙な、権力支配のための政治的論理であるマルクシズムでさえ、未来は権力がなくなるのだ、と口にせざるを得なくなり、滅びる宿命と、その歴史性を偽装せざるを得ない現状にある。

彼等は、権力支配肯定の論理を、否定の論理へ平然とこじつける、この政治的謀略なしには、自らの滅亡の必然を保持し得なくなり、偽善の畏に大衆を誘導す可く必死のものを見せている。

だが、如何に巧妙化されよう共、その本源的な病患を除去する事が出来ず、減びる歴史の証明から通れる事は出来ない。

ひるがえって思うに、創造されるものとしての歴史には、意志と意欲と体験の創造からなる、科学、文化、建築、等々の創造性に於ける精心的活動がある。これ等は、無限に近く進展する歴史を約束されている。

以上、減びざるものを底位に、減び行くものの歴史が綴られたと共に、減び行く性質の部位に対する、絶えざる闘争が、減ろびざる創造の歴史によってなされ、逐次駆逐し、より高度の発展をなしつつある。

この歴史こそ、人類にのみある、そして人類なればこそ為し得る、自覚的意識活動を伴うことによって、作造される歴史であると云い得られる。

六、綜 合 史 観

あらゆる現象の個々は、各個体を構成する、無量無限でしかも多種多様な、微粒子的因子の、綜合に依り構成された群結融合の一であり、原子は、陽子、中性子による核と、それに反陽子、中間子、電子、その他との共同又は集団同時運動体そのものの、融合の「一」を云ふ、この「一」の綜合現象そのものが、石であり、木であり、動物であり、人間であ

ると共に、地球であり、星であり、宇宙である。

然も綜合一体化の一であるこのものは、如何に微小なものにも、個体としての特殊性ある個性を所有し、個体の壊滅なしには、個性の滅亡も興り得ない。即ち、核分裂する事なしには、鉛は鉛であり、鉄は鉄である。

これは個々の人間の構造にも該当し、実証される所である。

無量に生存する特殊な個性を持つアミーバーは、その群結融合と云う綜合一体化により、人体の各部を構成し、その部分の綜合に於て人体は存在する。

この人体は、なおその上に、同じく無限数で多種多様なものの因子の綜合に於て、独立を構成した脳髓を持ち、意志し、意識活動する、物質外の派生を精心作用として持ち、活動せしめている。

即ち作用量子の介在であり、こうしたものをも含めた種因綜合の中に、各独立と個性ある人類の生存が、継続されたのである。

即ち、綜合の中の一部面を抜き取り、その事にのみ、論理の根拠を持つ事は病理偏執に該当し、正常であるとは云い得ない。

これは、人間生存の利那的現象に於てすでに然りであると共に、その継続と堆積を意味する歴史観に於て、その一部面を抜き取って、それによって発展せしめる論理は、詭弁、又は矛盾撞着以外ではなく、綜合的見解なしには、何事も完璧を期する訳にはいかない。

仮りに、本能のみを捕えて、全分野を説明しようとするが如きは、厳にいましめねばならぬ所であり、又生産関係のみの拔萃に於て究明しようとする事も亦、謬理を出でないものである。この種の偏執性痴呆を、弁証法的唯物論（史的唯物論）に多く見出し得る所である。

彼等の論理は、政治的立場に於ける見解、又は政治理論として、その一面での正しさを持つてゐるとは云える。が併し、それはあくまでも一面での事であつて、その正しさは、無知の儘に於ける民衆に、意志のない土偶としての動向を指し、それへの信仰を意味すると共に、支配者、又は権力把握者とその支持者による、経済関係一切の占有とその経過、及び、それによる結果と移行を、言葉巧みに物語るに過ぎず、それは必然に、反覆転移としての権力史を意味し、その意義に於ける、歴史の部分を証明する以外ではない。と云う事は、くれぐれもこうあつてはならないと云う、人間不在を強調した、一種の注告書として、理解す可きものである。

しかも彼等が、無支配、無権力の未来を、理想的必然として論理づけるのであるが、この否科学性と詭弁と空理性に於て、果して史観を論ずるに値いするであろうか。ここまで来ると、その政治的謀略も底をついたと云う可きであらう。

要するにマルクスレーニズムは、人間を政治以前のものとして理解する能力がなく、政治すると云うことを前提とした、政治家の描いた理想的政治理念であり、それを理論づけ

た哲学であり、経済学であり、社会学である。

又その史観なるものは、人類及びその生活の部分の説明によつて、全体を律した、偏見と狹隘な拘束の論理であり、人類史の、そして総ゆるものの構成を、古典物理学そのものにのみ依る、一元的見解をとる事と、量子力学及び素粒子論の多元性、及び総合性、あるいは相補的な不確定性原理や、作用量子的立証の皆無な事、それのみでなく、否むしろそれ以前の、すでに次元の異なる存在でしかない。

彼等の人類に関する史観は肝腎な人間そのものが不在であり、その上、ホンの近世史に該当するその中の部分の、併もなお、その中の一局部を主体に敷衍した、形而上的皮相な説明を、全体かの様に装う以外ではない。

以上、総合的見解こそ尤も妥当なものとして、その反対の場合の引例をもととして記述したのであるが、要するに、この史観は、何ものにも拘束せられる事のない、自由な人間的な立場と、無拘束の故に作られる、無理のない自然な、しかも自由なればこそある秩序を根拠に、能う限り人類そのものに密着した、むしろ在りの儘を發展せしめた史観であつて、史観の前に、あらかじめ描かれる様な、基本的論拠を用意して置くのではない。即ち弁証法的唯物論を用意して、史観を構成する様な、拘束を基点とする論理は、史観を拘束の坩堝に閉じ込め、狭少と猥雑の中に自らを投じ、偏妄に陥入る結果、詭弁も又生づるのである。

こうした偏執と虚妄は、過去の多くの史観に見聞する所であつて、ある時は英雄（多量虐殺の遂行者であり元兇である）のみの史実となり、あるいは、政治的、権力支配の変換のみの描写で終り、近世には、弁証法的唯物史観のその如く、各々その特徴とする所は、時の支配者、又は政治的指導者と称する強権把握者にとつて、最も好適な方向への歪曲を常とするのである。

もとより史実は多様であり、多種多源であつて、どのような時代と云えど、その一つとして総合的結果ならざるはないのである。

で筆者は、ダーウキンの進化論に於ける一元性に対して、多大の疑問を禁じ得ないし、むしろ、この学説は、すでに過去のものであり、十九世紀的な、前近代性とその特徴を持ったものであると思える。

人類史二十万年（五十万年、あるいはそれ以上とも云われる）に及ぶ人類の過去を偲び、今後繰り延べられるであろう、人類の未来に思いを馳せる時、たつた今の、この現実の各個人が、この身の儘、過去による結果であり、未来に向けての原因ともなる意義に於て、この現実の個体は、総合的史実の一事象であつて、ここには多元の総合と、無限数の素因の、融合による一体化である「一」を見得ると共に、無限への「一」の素因を、あらゆる角度を通じて描き、総合の原理に於て、美をとり醜を捨て得るであらう。

かくて、人類史が人間に依つてなり、人間性によつて未来する事を確認すると共に、人

類史は、人間性のみによつて創造された過去であり、人間のみによつて、そして人間なればこそ、創造される未来史である事を、人間的特殊性（生物内に於ける人類的個性）に於て確信するものである。

七、結 論

以上、各項目別に列記したものの、これ等のすべてを結合融和したものが人類史であり、もともと総合的なものであるが、便宜上、仮りに、各分野に分けて記述したまでのもので、相互に交流し合う所に、史実としての実体がある。その根元を探ねるなら、人類蒼生の当初から、持続しつづけた四大本能と、意志し意識活動する、そのものとの相互の交流と、群結融合（集団同時活動）が、因となり果となつて、現象したものである。その内の如何なる部分を捕えて見ても、単なる因果律を持つては、測定する事の出来ない、多元性と無限の因子を見出さない訳にはゆかない、質と量によつて人類史は作られている。こうした、史実を構成する各時代の部分的要素は、結局は、各個人にまで帰納する事なしには、その因子の究明は為し得ない、その個人は現時点に於ける自我であり、その自我は、過去の永かった人類史の表徴であり、未来への一因子なので、この自我は、本能を所有する意志し意識活動する、この形態を現に持つ、肉体の個であり、常に創造を余儀なく